九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[032] 史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2339092

出版情報：史淵. 32, 1944-07-30. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン：
権利関係：

彙報

昭和十九年度第十五回 九州史學會大會

本年度春季大會は五月三十日久留米市に於て市當局の後援を得て開催した。午前中は石橋德次郎氏邸に書畫を見學、午後一時半より仝市金丸國民學校講堂にて講演會を開催、國民學校教員を始め一般聽衆者多數にて頗る盛會であつた。講演會終了後六時より久留米市野中屋にて晩餐會及研究發表會を行ふ。市長を始め市教育課、眞木泉守顯彰會の方々御出席にて盛會裡八時閉會した。終りに今度の春季大會に於いて市長を始め久留米市當局の多大の御好意、及び重要美術品を快く見學させて下さつた石橋德次郎氏の御好情を厚く感謝す。

石橋德次郎氏邸展覽目錄

一、後西天皇御懷紙詠水鄕眺望　一軸
一、銅製經筒天永元年十二年日銘永滿寺趾發掘　一箇
一、石山切伊勢集斷簡　一軸
一、歌合斷簡左齊客女御右式子內親王　一軸
一、賀茂詣圖北野緣起　一軸
一、豊臣秀吉消息　一軸
一、水西艸堂圖田能村竹田筆　一軸
一、下筑水詩賴喪筆贈菊池五山　一軸
一、寓於環春亭草坪畫　一軸
一、竹田山陽小珠卷　一卷
下筑水詩並畫戊十一月賴喪筆
畫並詩　田能村竹田筆
一、有田燒皿柿右衞門作　一枚
一、南京赤繪皿　一枚

講演會

一、支那側より觀たる元寇の役

重松俊章

題目を簡捷にする爲めに『支那側より觀たる元寇の役』としたが實は元や高麗その他西方の資料から觀た元寇の役を述べるのである。一体歷史上の出來事は資料の出處に由て其の確實性を異にする。現時の世界、戰局に於ても米・英・蔣等の反樞軸側の戰局の報道などは政策的な不純な動機に由て殊更に事實を揑造又は歪曲されてゐるので殆どその六七割は當てにはならぬ。元寇の場合でも敵側では出征將士が敗戰を糊塗せる報告に基く

ものが多く、その戰局に關する限り、區々にして信用に値しない點が多い。日本側の資料でも參戰の將士が戰功を誇張して論功行賞に領地や莊園の增加を狙つたやうな者もあり、又社寺側の古文書などにも寺社領の寄進目的による此の種のものが多分にあることを注意せねばならぬ。

さて本題について述べるが、元世祖は至元（文永）二年に高麗人から日本との通交の容易なる事を聞いて我が國に使節を派して元の附庸藩屬とせんとするの野望を起し、至元（文永）三年姉めて黑的・殷弘等を正副兩使として高麗使臣に嚮導させて我が國に遣はしたが、高麗側の手配の不備や冬期の難航などの都合で一旦引還へし、更に至元五年九月に再出發して、翌春、對馬に到着したものゝ、島司に拒まれて島民二人を掠め去つた。此の島民は元世祖の命により其年九月高麗の使者に由て送還されたが、元は使節派遣の目的たる日本政府の回答が得られないので至元（文永）七年末、改めて趙良弼を使節に任命し翌八年九月趙は高麗を出帆して同月中に築前今津に上陸して太宰府の宰臣と國交の事を折衝した。併し彼は直に回答が得られなかつたので太宰府の使佐十二人を伴つて一旦高麗に歸還した。かくて翌九年正月此の宰府の使佐一行は元の書狀官等に伴はれて燕京に往つたが元世祖は謁見を允さず、同年三月之を日本に送還せしめた。之につづいて同年四月趙良弼は高麗から再び太宰府に來つて前年提出の國書の回答を求めたが遂に要領を得ずして歸途につき翌至元（文永）十年三月元廷に歸還して世祖に使命の不首尾を奏上した。翌至元（文永）十一年の文永の侵寇役は此の趙の復命の結果に依て決行された蒙古政府の非常手段であつた。尤も世祖は之より前、日本との交渉が失敗に終つた場合の侵寇計畫については可なり周到な手配を定め、本國は勿論高麗にも命じて造船・貯糧・兵備等を整へてゐたから、愈々日本との交渉が失敗に歸すると至元（文永）十一年三月忻都・洪茶丘等に命じて愈々日本侵寇の命を下し、五月には元の東征軍一萬五千が高麗に到着し、（高麗史料では二萬五千とあるから之が事實らしい）高麗軍八千と合し、之に梢工・水先案内・舵手等六千七百人を加へて九百艘の艦船に乘じて同年十月初め對馬を侵し同月半、引つづいて壹岐や松浦半島沿岸に襲來して到る處殘虐を恣にした。次いで、博多灣に來襲して、我が鎭西兵團と博多・筥崎濱や赤阪方面で激戰を交へた上その夜は志賀島・玄海島などに引擧げたが、當夜半から翌日にかけた暴風雨で敵の艦は巖壁に打碎かれたり、淺瀨に乘上げ顚覆破壞して文永役の元の征東軍は大敗に終つて翌十一月生命からく高麗の港に引擧げた。然るに此の失敗にも懲りず元世祖は翌至元十二（建治元）年二月に再三杜世忠・何文著等の使節を我が國に派遣して入貢を要求したので北條時宗は九月之を鎌倉、龍ノ口に斬つてその要求を斥けた。當時再三の派使に對して朝廷では國書の回答を與へられる御趣旨であつたが圓覺寺開祖祖元等に禪を學んだ時宗は宋に同情を有ち、元の態度を喜ばず朝廷の勅書を握りつぶして元へ回答を與へなかつた。此の頃世祖は豫め日本との

交渉の決裂に備へて支那南北各地の要港に命じて征東戰艦の建造を命じ又高麗に旨命して九百艘の造船や兵員・糧餉を用意せしめたが、至元十六（弘安二）年六月范文虎の私發した周福欒忠等の遣日使節の消息も判定せず加ふるに其年八月杜世忠等と同行した高麗の梢工・引海（水先案内）の上左や一冲等が逃げ歸つて杜世忠・何文著等の斬殺された模樣が元廷に傳へられたので世祖は再び意を決して大擧日本再征の大軍を興し之が弘安四（至元十八）年の再度の蒙古の襲來となつて現はれたのである。此度の元軍は遼東高麗方面の陸路から來た忻都・洪茶丘・金方慶等の率ゐる蒙・漢（北支人）・麗の四萬の東路軍と寧波から出帆した范文虎李庭等の帥ゐる江南方面の蠻子軍（マンジ）（宋軍）とから成りその艦船の總數も優に四千五六百艘以上に達してゐた。始め東路軍は壹岐で江南軍と會して日本本島に侵入する豫定の處江南軍の到着が延びたので最前に壹岐から博多灣内を襲ひ此の沿岸で日本軍と激戰を交へた。その中、江南軍の先發隊は壹岐に着き、次ゐで其の本隊は平戸に到着して博多と松浦午島の西岸とで日元兩國軍の間に乾坤一擲の大亂戰が闘はれたのが弘安四年七月の事で、その月末頃には元軍ら旗色漸く惡く博多灣や壹岐の敵軍は一旦平戸に集結し、更に鷹島に移つたが八月朔日（日本閏七月朔）例の神風の來襲に依て元の艦船はその大半が破壞沈沒したので忻都・洪茶丘・金方慶の東路軍の統帥も范文虎・李庭等の江南軍の元帥等も幸に堅固な高麗船に乘じて、部下將兵の大部分を置去りにして生命からく朝鮮南岸に遁げ歸つた。かくて平戸島の五龍山下や松浦の沿岸に取殘された元の敗殘兵等は鎭西武士の追擊に逢つて、蒙・漢・麗の出身兵は悉く殲滅し盡され僅に蠻子軍（宋兵）の一部が奴僕工匠として鎭西武士の間に分配された。後、これらの敗卒中の于閭・莫青・吳萬五など云へる者が支那に遁がれ歸つて詳しい戰局を報告してから汎く元人の間にも弘安役の元軍敗北の事情が判つて、元史日本傳などには當時の模樣が比較的詳細に記述さるゝやうになつたのである。

元世祖は弘安役後も依然として日本征服の野心を棄てず、心ある臣下の諫止にも係らず征東行省（征日本辨事官衙）を高麗或は遼東などに設置して、沿海各地で征日本船艦を建造して之を一時の便宜から南北支那間の漕米船に利用してゐたこともあつたが、その中安南や緬甸征伐の役に累はされて遂に日本侵寇の素志を飜すの止むなきに立到つた。次に文永・弘安兩役に於ける元側の準備として北支の灤河口や楊子江岸・浙閩沿岸などの諸港で多數の艦船を建造した結果當時の支那造船技術の發達や航海術の進歩なども見遁がせない。次に此の頃元世祖は畏兀兒出身の將軍阿里海の提議に由り、波斯の伊兒汗國主阿八哈（旭烈兀の子）から巨砲の製作匠を求めて、至元（文永）八年、其の國から伊斯瑪音（Ismaid）と阿老瓦丁（Aroi-ud-din 一名阿喇卜丹 Arapian）の兩匠を得て、之等の技術を利用して旺に大砲を製造して之を前線に利用した。南宋が案外に早く敗滅したのも之に原因する處が多いのであるが此の火器を更に文永弘

安兩役に利用して大に我が軍を惱ましたものである。

次に元世祖忽烈汗が何故特に海を隔てた遠隔の地たる日本の征伐を執拗に繰返して最後までその素志を飜さなかつたかといふことは千古の謎であるが之は世祖の單なる酔興や氣まぐれではなく何かその他に重大な原因があつたらしい。征服慾としても利害の打算上引合はない。仍て此の深因として考うべきは南宋や契丹（遼）女眞（金）西夏などの征服の結果によるそれら各國の降服兵の利用や後始末をつける爲めに前後二回の日本襲來や安南・緬甸・眞臘等の征伐の原因が考へられる。併し之は單なる余の推測で、何ら之に對する積極的な證憑は今日迄の處發見されてゐない。

尙最後に元寇役と大東亞戰との比較論や『神風』の本質なども論じて見度いのだが時間がないので省略する（昭和十九年五月九州史學大會講演手記）

一、眞木和泉守の攘夷論と世界秩序の理念

竹岡教授

（內容は本志三十三輯に論文として揭載の豫定に就き概要紹介を略す）

研究發表

一、西藏佛教起原考

庄野眞澄

西藏佛教を普通ラマ教（喇嘛教）と稱してゐるが、ラマとは梵語の uttara 即ち最上者と云ふ義で、僧院の上座若くは著名の高僧に用ひた稱號であり、或は師匠即ち梵語の guru に相當すとせられ、此が遂には絕對界にまで引き上げられ無上の理想を表現せる者であると考へられ、更に他の意味が附加せられ、化身ラマの思想まで生れるに至つたのである。扨てこゝにラマ教が何時西藏に傳はつたかについて考へて見度い。支那側の史料に見るものでは唐の太宗の貞觀十五年文成公主が西藏王弄讃王に降嫁したが、この王の時代に佛教が傳はつたとせられるが、それは所謂公傳であつて。それ以前に私傳とも云はるべきことが傳說によつて窺はれるので、それはあたかも支那佛教乃至日本佛教の傳來等に於て見られる事象と同樣かと考へられるが、唐代以前の支那の狀態或ひは五、六世紀頃の印度の狀態等から推して、弄讃王出現前すでに私的に、佛教徒或は佛教徒ならぬ商人等の手によつて佛像がもたらされ、或は佛典が傳へられたことを認めないわけにはいかないであらう。かくして佛教なるものが西藏に於て徐々に基礎づけられ育成せられて、弄讃王の時に至つて一度に開花してその全貌を發揮したものである。故に吾人は弄讃王時代に佛教の公傳を認めながらも、西藏佛教の起原についてはそれ以前に溯りうることを指摘したい。（本人手記）

一、劉錫鴻の「英軺私記」について

本村正一

劉錫鴻は廣東番禺縣の產。清光緒元年駐英公使館副使となり、光緒四年駐德公使に轉ず。本書は英國の政敎・風習に關する在英中の見聞錄であるが、西洋文物に對する偏見曲解の尠きのみならず、却つて此を讃美する所が多い。例せば、その政体を評して、官に冗官なく民に遊民なく、官と民と意志疏通し、政制寛仁にして社會に繁文虛禮の風なきを以て善治なりと云ひ、特に敎育制度の完備普及し、國民の敎養講求の念旺盛にしてその程度の高きを稱揚し、英國の富强を致せる此に基くことを指摘する。尤も彼は國內政治の實際的方面に參與せることなく、故にその西歐文物禮讃も直接には洋務史上何らの成果をも遺さざりしも、攘夷排外の思想猶熾烈な清末に於ける一部知識人の進步的傾向を測る一例としてみる時、一顧に値ひすと謂ふ可きであらう。（本人手記）

一、本居宣長の中世的傾向

城福勇氏

（梗概省略）

國史學會

國史關係事項

新入學々生歡迎會

昭和十八年十月入學々生歡迎會を十月二十三日第二學生集會所にて行ふ。出席者は竹岡敎授を始め、井上古賀副手二・三年學生にて新入學生上杉伸生君、近藤典二君、松澤美作君、周田謙藏君、鈴木信君、寺下長義君、栖山光五郎君を迎へ盛會であつた。

新制大學院研究生入學

十一月一日新制大學院研究生として昭和十年度國史科卒業の西尾陽太郎氏及び井上忠副手を國史學研究室に迎ふ。

國史研究會

昭和十九年度國史研究會一月廿日（木曜）第一回研究會を演習室に開く。福澤諭吉の「學問のすゝめ」を中心として明治社會思想研究を毎週金曜日午後開しことに決定、四月下旬まで繼續す。

第一回研究發表會

四月十四日、三長閣にて研究發表會を開く。

一、時代區分の一考察　三年　竹田正丹君
一、宣長の德川幕府觀に就いて　二年　高橋正信君
一、史學研究の一考察　一年　近藤典二君

第二回研究發表會

四月二十四日　三年生川中庄介君に名譽の召集來り壯行會を兼ねて研究發表會を開く。

一、神代概念の成立

三年　川中庄介君

わが國體は人間行爲の最大奇蹟で、その淵源は既に上代に一應完成してゐたのである。こゝに上代史研究の意義があるが、その中で最も根本的な問題は神代史の概念が成立した事であらう。この概念が成立した年代は萬葉集に見るに大体に於て大化改新の前後である。その內容は時間的には過去、即ち神代七代の語が示すところであり、空間的には高天原を指すに至つて居る。かくて神代と人間の代とは一應分裂するのであるがそれは現身でありながら神ながら、現人神として君臨される神聖なる權威の万世一系の連續によつて、再び結合するものであつた。そして國民はこの神聖の御仕業に參加することにより永遠性をこの地上に於て得るのであつた。

かくて神代概念成立の意義は、權威を理論的な形に於て見出すに非ずして、過去に實現されたものとして受取らんとする日本復古運動の一原型であり、わが國に於ける人間存在の神聖觀がその基体となつてゐるのである。

宮地獄の出土品國寶見學

四月廿九日　天長節の式後竹岡教授を始め、古賀副手西尾研究生、榊原氏、近藤、上杉、松澤の諸君參加。竹岡教授の御說明にて我國上代の工藝品を鑑賞、歸路を省線福間驛まで歩き天長節の佳き日を一日有意義に過す。

學生の入營及び應召

昭和十八年十二月一日の學徒出陣に我が國史科より三年生では西高辻信貞君、二年では浦達夫君、波多江一俊君、一年では岡田謙藏君、鈴木信君、寺下長義君、檜山光五郎君を送る。四月二十四日に三年生川中庄介君を、五月廿六日に三年生竹岡正丹君に名譽の召集來る。

九州支那學會

日野助教授には二月廿七日より一個月學術研究の爲滿洲・蒙疆華北に御出張、その間奉天・新京・熱河・北京・大同・張家口各地を歷て三月廿八日歸學せられた。仍て四月十三日學生集會所に歡迎會を開催、楠本・目加田・日野・松枝・小林五教官外四名出席、同先生の旅行談を拜聽、更に晩餐を偕にしつゝ諸先生の支那旅行追憶談あり、歡談の後散會。

西洋史學研究會

臨時講義のため御來學の千代田謙先生歡迎會を兼ねて六月九日醫學部惠愛會館に開催、左記の紹介があり、これについて千代田先生の種々有益なる御批評を拜聽、さらに同先生より「立

体史觀に就いて」と題する御講話をいたゞいた。こゝに謹んで先生に深甚の謝意を表する。（讃井）

一、Paul Rühlmann, Der junge Ranke. Deutsche Rundschau, Bd.236. (1933)

小林榮三郎

「史料批判の搖藍期における」といふ副題が示すやうに、ランケの史料批判的方法がフランクフルト・アン・デル・オーデルのギムナージウムにおける實際の教育体驗と密接な聯關を有することを强調したもので、史學史的に深みのある論攷ではないが、一家言として傾聽すべきものをも含んでゐる。まづヘルマン・オンケンの好著「ランケの初期」もオンケン自身かうした、實際的授業經驗に乏しいため肝腎の点の解明が不充分であると斷じ「近世史家批判」（一八二四年）のなかでランケが「歷史は目擊者の報告にもとづいて認識されねばならぬ。他の史料がさうした報告の代りになるのは、それが目擊者の報告から取來られたものであるか、あるひは何らか本源的な知識によつてさうした報告と同樣なものになつた場合にかぎる」と述べた史料批判の原理は、純粹な眞理探求よりもむしろ主として歷史授業の實際から、學校における教育上の必要から生れたもので、この點が今まで見落された原因の一部は後年のランケの貴族化的傾向 aristokratisierende Neigungen にあり、この傾向はドイツの專門史家に强く影響したとリュールマンは主張する。すなはちウオールタ・スコット流の歷史小說や自由保守の政見やヘーゲル的な國家哲學などによつて歷史事實が恣意的に取扱はれることに對して、ランケは實際に生徒を指導する上から、根本的な史料そのものに遡ることこそ最良の方法であると考へたのである、とされる。しかしリュールマンの主張するやうに實際の授業經驗が主因であるならば、當時のギムナージウムの歷史科教師は皆かうした史料批判に到達した筈である、といふ反對論も成り立ちえよう。またライプチヒにおけるランケの師ゴットフリート・ヘルマンやニープールの影響を重視する舊說に對して「なるほど、さうした事實も直覺的（intuitiv）には當つてゐるかも知れないが、それよりも遙かに强度に、教育的事情、實際的な授業上の必要こそランケをして中世史や近世史の領域においても史料に遡源せしめたものである」とするリュールマンの立言も「直覺的」の語義が明確を缺ぎ、我々を充分に納得せしむるには足りないやうである。

一、ハインリヒ・リュッツェラー「バロック觀の變遷」について (Deutsche Vierteljahrsschrift für Litteraturwissenschaft u. Geistesgeschichte, 1933. 所載)

松垣裕

所謂「バロック的なるもの」の本質的性格が、十九世紀中葉

以降現代に至る迄、どのやうに觀られて來たか、又その觀察の方法は如何なる發展の道を進んで來たであらうか、といふ問題を取上げ、バロック研究の先驅者ヤコブ・ブルクハルトからヴェルフリン、フランクル、プリンクマンを經てウイリイ・ドゥロスト迄、二十數名の研究家の所論を簡單に紹介批判しその發展段階を跡づけようと試みる。

リュツツェラーは、バロック觀の發展段階を類型化するに當り、その出發點を美術、就中建築及び造形美術に關する研究叙述のみに限定し、文學に於ける「バロック」は非体系的なものとして取上げない。彼の述べる所に依れば、先づバロックのもつ表面的な價値を判斷しようとする試みからバロック研究は始められ、第二に箇々の具体的な美術形式を解明しようとする段階に進み、第三に形式の中に内在する精神的な意味内容を究めようとする段階に、最後にそこから美術、文學等を包括する全文化の時代精神的基盤としての世界感情（Weltgefühl）こそ、バロックの本質であるとする綜合的なバロック觀に到達した、とされる。

最後に彼は、諸々の段階、種々な學説に含まれる問題を能ふ限り廣範圍に採究し、發展史的諸問題として、（一）バロックは如何にしてゴチック、ルネッサンス、ロココと區別されるか、（二）バロックは古い段階を代表するか、それとも新しい段階を代表するか、（三）バロックに於て民族はどのやうな影響を與へたか、（四）凡ての藝術に共通な要素としての「バロック的なるもの」とは、何を意味するか、（五）バロックは現在の我々の精神的な立場からどのやうに意味づけられるか、（六）バロックが人間に對してもつ永久的な意義とは何であるか、といふ六つの問題を提出する。

彼の説くところは、從來行はれた學説の紹介といふ點では極めて常識的であり、發展段階の類型化の方法にも、それ自体問題となるべき點が見出されるが、彼の提出した問題は今後の研究に取つて甚だ含むところが大きいと云はねばならない。

史學關係講義題目（昭和十九年四月ヨリ）

國史、日本思想史

古事記演習　竹岡教授
日本史學史　竹岡教授
上代史ノ諸問題　竹岡教授

西洋史

西洋史概説　小林助教授
演習　Kleter: Deutsche Kultur zwischen Völkerwanderung und kreuzzügen　小林助教授

東洋史

概説中亞古代文化史　重松教授
特講支那近古史學史　重松教授

支那古代史概說　日野助教授
演習（遼史食貨志）　日野助教授

地理學

自然地理學　松下助教授

臨時講義

史學史的研究特講　廣島文理大學教授　千代田謙氏

その他

西洋近世哲學史　四宮　教授
希臘哲學史概說　田中助教授
西洋哲學史　瀧澤　講師
西洋古代倫理學史　永野　講師
美學美術史　矢崎　教授
東洋美術史　矢崎　教授
印度佛教史概說　干浮　教授
南方佛教史　干浮　教授
國語學史　笹月　講師
支那文學史　松枝助教授
十八世紀佛文學史　進藤　教授
日本法制史　金田　教授
日本經濟史　宮本助教授

九州史學會本年度委員

顧問　長沼賢海　吉田寿

委員長　常任委員　竹岡勝也

常任委員　重松俊章

日野開三郎　小林榮三郎　鏡山猛

委員　井鉄男　古賀平七　本村正一　山口國幹　高橋正信　鈴木正　松垣裕

書記　牧久